

ゆきとじいじいのオリエンテーリング

No12 ゆき：渡辺 幸（8歳） 爺爺：武石雄市

小学校低学年の距離感覚について

山形2日間大会2日目(7月21日)の事

コース距離 3250m。幸がスタートして1時間近くになる。そろそろゴールに現れる頃合いに、近くの木陰にもじもじしている幸の姿を見つけた。

爺爺「オーイ 幸! ゴールか?」

ゆき「ううん、2番の左に曲がる分岐がいくら行っても無いから、ぼく戻ってきちゃった」

爺爺「1番は取ったの?」

ゆき「うん、1番を取ってさ、広い道路から小道を登っていくら進んでも分岐が無いんだもん」

爺爺「どれ、地図見せて。小道を登ってこの曲がりにはわかったの?」

ゆき「うん、このカーブ?わかったよ」

爺爺「このカーブをチェックポイントにして、曲がったら300m位走れたんじゃないの?」

ゆき「そうだよ、ぼく走ったよ」

爺爺「ゆき、この曲がりから300mくらい行ったら分岐は必ずあるんだけどな」

ゆき「ぼく、300mくらい走ったよ。でもさ、昨日の2番も分岐が解らなくて通り過ぎたし、今日も通り過ぎたと思って戻ってきたんだ」

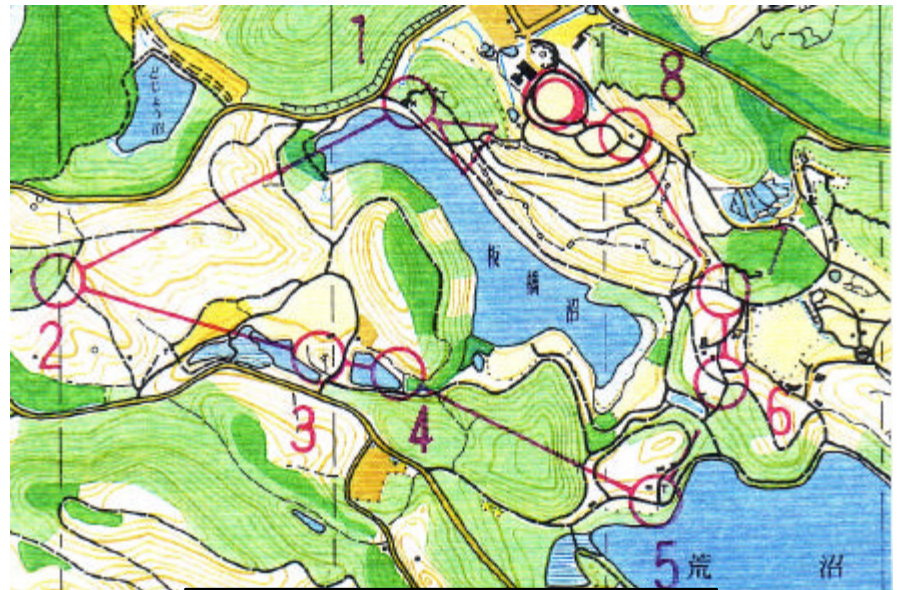
爺爺「そうか。ゆき、距離はどうやって確かめるのかな」

ゆき「どうやるの?」

爺爺「大人の人、チェックポイントから歩測して何百m進んだか地図で確かめながら走ってるんだけど、子供は難しいかな」

ゆき「どうしたらいいの?」

爺爺「幸は、3年生だけど運動会の徒競走は60mかな」



2番の北側分岐手前で戻った M12 のコース

ゆき「ううん、80mだよ」

爺爺「そうか、今度学校のグラウンドで100mを何歩で走れるか測ってみるか、それを目安にしてオリエンテーリング大会で歩測することを試してみたらいいよ」

ゆき「わかった」

爺爺「でもさ、今日の地図は1万5千分の1だから、計算が難しいんだけど、地図の左下に100mの区切りをつけて500mはこの位ですよって示してあるだろう」

ゆき「知ってるよ」

爺爺「そしたらさ、カーブから2番に行く分岐までコンパスのスケールで道の長さを何cmか測って区切りで確かめたら300m位って解るだろ」

ゆき「じいじい、それわかったけどさ、昨日の2番にも小径の分岐がわからなくて探したよ」

爺爺「そうか、昨日もそんな事があったのか、地形が読めてくるまでゆきたちのコースをつくるには爺爺も勉強するよ。ゆき、どうする?もう一度2番を取りに行く?」

ゆき「ぼく、お腹空いたから、もう行かない」

爺爺「そうか。そしたらゴールでパパと誠ちゃんが係りをしてるから、『ぼく、ペナでーす』とコントロールカードを渡してください」

ゆき「はい」

完走できなくて悔しかったようだ、背に腹は替えられず涙を拭いて走っていった。



走っても分岐が無いよ 戻っちゃえ。完走できなく、悔しくゴールレーンを通るゆき

スキー選手のための

愛宕山登山競争の事

平成 14 年 7 月 31 日 (水)

7 月初旬、米沢から東根に電話が掛かってきた。

ゆき「じいじい、7 月 31 日予定ある？」

爺爺「あるよ。9 月の東根大会の地図調査してるよ。8 月 1 日から幸と綺羅（幸の弟、3 歳）と爺爺の北海道 10 日間、修行の旅があるから、それまで調査をまとめたからね。どうしたの？」

ゆき「ぼく、愛宕山登山競争に出たいんだ」

爺爺「出ればいいじゃん、愛宕山登山競争は米沢のスキー選手がたくさん参加する大会として有名だよ。爺爺は応援に行けないと思うけど、頑張ってるね」

ゆき「じいじいが来なければ、ぼく、出れないんだ。中学生とかはいいんだけど、小学生の低学年は家の人がいなければ駄目だって」

爺爺「そうか、保護者付か」

ゆき「そう。ぼく出たいんだ。パパもママもお仕事で休めないから、じいじい、お願い、米沢に来てくれない？」

爺爺「何時からなの？ 午後 3 時から」「よし、行こうか。ついでに、じいじいも参加するよ」

ゆき「ほんと！爺爺のも申し込んでおくね！」

当日の午後、ゆきの家から二人とも自転車スタート地点の地藏神社に到着した。ずいぶん賑やかだ。それもそのはず、今夜は愛宕山の火祭りなのだ。開会式の場所では数々のカップやトロフィーが並んでいる。

それにしても今日は暑い！まだ 36 もある。熱中症を心配した主催者からのアナウンスがあり、例年なら午後 4 時にスタートでしたが、今年は、会場の都合で 3 時のスタートになり、しかも、今年は小学生の参加が多いので 3 年生までは距離を

短縮して 1000m の場所をゴールに変更と発表された。それでも登距離が約 200m はある。

ゆき「じいじい、1000m の距離ってどのくらい？」

爺爺「1000m は 100m を 10 回走る分だよ」

ゆき「違う、ここからだったらどの辺までかなってこと。ゆきの家付近まで行くかな？」

爺爺「うーん、ゆきの家までは行かないよ。学校でマラソン練習している距離はどのくらいなの？」

ゆき「学校の周りの道路を走ると 900m だよ」

爺爺「じゃあ、学校の周りを 1 周と 100m で 1000m じゃないか。でも、ずーっと急な登りだから、はじめから頑張ると、ばてちゃうぞ」

ゆき「わかった。スタート 10 分前だって。なんだか緊張してきたな。あれ！じいじい、ストックを持って走るの？」

爺爺「そう、じいじいはポールランニングをするんだ。ピョーンさんから 1 週間に 1 回ポールウォーキングしなさいって言われてるしさ」

ゆき「じいじいは、転ばぬ先の杖だね」

レース後、表彰式の前。

爺爺「ゆき、どうだった？」

ゆき「わかんない？」

爺爺「爺爺は途中でゆきを追い越したんだけど、直ぐ、ゆきが追いついていったね。あそこでどうしてあんなに頑張れたの？」

ゆき「あそこのカーブ曲がったら、少し平らなところにゴールが見えたんだ」

爺爺「あんなに速く走るからビックリしたよ。2000m 走ってもじいじいより勝つかもね」

ゆき「ママが応援にきてたね。ゆき頑張れ！って聞こえたよ」

爺爺「そうか、ママ来てたか」「ゆき！スキー連盟の海老原先生に聞いたんだけど、ゆきが低学年で一番速かったって」

ゆき「ほんと？賞状もらえるかな？」

表彰式で、今年から低学年に特別賞が制定され、将来のスキー選手を目指してもらうため、努力賞と書いたトロフィーが与えられた。

ゆき「うれしい！ぼくトロフィー貰うの初めてだよ、先生にも見せるね」

爺爺「よかったね。頑張れば、賞が貰えるんだね。爺爺と同じようにスキー選手になれるかな？」

ゆき「来年は、みんなと同じように頂上までだね。ぼく、来年も出たいな」



努力賞のトロフィーを貰って
喜ぶゆき